

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 22 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531259

研究課題名(和文) 小学校における異年齢集団による交流に関する研究 「縦割り班」活動を中心に

研究課題名(英文) A Study on Multiage Group Activities in Primary School : Centered around Activities of Tatewarihan

研究代表者

毛利 猛 (MOURI, TAKESHI)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：50219961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)： 学齢期における異年齢集団活動の教育的な意義を理論的に根拠づけるとともに、香川県および兵庫県・中西播磨地域の小学校における異年齢集団活動の取り組みの現状に関する調査を行った。調査の結果、近年、大規模校を中心にペア学年・兄弟学級の取り組みが急速に普及していること、「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年・兄弟学級の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： I clarified the pedagogical significance of multiage group activities during school child age and surveyed actual trends of its activities in primary school in Kagawa prefecture and midwest harima region in Hyogo prefecture. An analysis of the survey results clarified the following points: In late years, activities by pairs of different grades have been rapidly spreading mainly in large scale schools. We are coming to the turning point from the phase Tatewarihan activities had spread to primary schools across the country to the phase activities by pairs of different grades is spreading.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：縦割り班 ペア学年・兄弟学級 特別活動 異年齢集団による交流 小学校

1. 研究開始当初の背景

(1) 少子化とともに兄弟姉妹の数が減少し、また地域における異年齢の遊び仲間集団も崩壊するなかで、小学校において意図的に異学年の仲間集団を組織し、上級生と下級生の交流を図ろうとする取り組みが行われている。そのような小学校における「異年齢集団による交流」のための取り組みのなかには、児童会活動やクラブ活動などのように、教育課程のなかに明確に位置づけられている集団活動もあれば、「縦割り班」の活動や「ペア学年」「兄弟学級」の活動のように、教育課程の上での位置づけがあいまいな異年齢集団活動もある。

(2) 「縦割り班」活動やペア学年・兄弟学級の活動の取り組みは、子どもの社会性を育成しようとする教師たちの、それぞれの学校の創意工夫を生かした教育活動として、高度経済成長の終わり頃から全国の小学校に徐々に広がっていったものであり、筆者が平成 14 年に調査した時点で、「縦割り班」活動は、小規模校を中心に全国のおよそ 3/4 の小学校で実践され、ペア学年・兄弟学級の活動は、大規模校を中心に全国のおよそ 1/4 の小学校で実践されていた。ところが、こうした「異年齢集団による交流」の取り組みは、その後、大きな「転換期」を迎えることになった。これに取り組むことの意義はますます高まっているにもかかわらず、学校で取り組むための「条件」が急激に悪化していったのである。

(3) それだけに、今回の学習指導要領の改訂において、特別活動のいくつかの活動の内容とその取扱いに「異年齢集団による交流」ということが明記されたことは、大変意義深いことである。異年齢集団活動の教育的な意義を理論的に根拠づけ、小学校をめぐる新しい状況変化のなかでの、こうした取り組みの現状と担当教員の意識を明らかにすることは、きわめて大切なことであると考えた。

2. 研究の目的

(1) 学齢期における異年齢集団の構造と特質、「異年齢集団による交流」の教育的意義を理論的に根拠づける。

(2) 香川県および兵庫県・中西播地域での調査を手がかりに、平成 14 年の全国調査との経年比較を行いつつ、小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みの現状と、この取り組みに対する学校規模別の担当教員の意識を明らかにする。

(3) 姫路市の公立小学校 69 校の「縦割り班」お

よびペア学年・兄弟学級の編成状況(学校規模別)について、これを一瞥的に俯瞰できる「異年齢集団活動マップ」を作成する。

3. 研究の方法

(1) 異年齢の子どもの交流や特別活動における仲間づくりに関する研究など関連文献を幅広く精査した。

(2) 香川県および兵庫県・中西播地域の公立小学校を対象に、「縦割り班」ペア学年・兄弟学級、地域ごとの集団などの異年齢集団の編成状況、活動内容と活動頻度(小集会、大集会、当番活動、集団遊び、学校行事、ボランティアなどの異年齢集団での実施頻度)などの現状を明らかにするとともに、「異年齢集団による交流」の取り組みに対する担当教員の意識を明らかにするためにアンケート調査を実施した。

(3) さらに、上のアンケート調査の対象校である中西播地域の公立小学校 154 校のうち、とくに姫路市の公立小学校 69 校については、アンケートの未回収校にも直接問い合わせる等の方法で、全 69 校の「縦割り班」およびペア学年・兄弟学級、地域ごとの集団の編成状況に関するデータを網羅的に収集した。

(4) 香川県および兵庫県・中西播地域での調査結果、とくに姫路市の「異年齢集団活動マップ」を使って、「縦割り班」およびペア学年・兄弟学級、地域ごとの集団という 3 つのタイプの異年齢集団の編成状況と学校規模との相性に関する分析を行った。

(5) 香川県および兵庫県・中西播地域での調査と、平成 14 年の全国調査との経年比較によって、異年齢集団活動の「転換期」に関する分析を行った。

4. 研究成果

(1) 筆者は、平成 23 年 12 月から翌年 1 月にかけて香川県の公立小学校 179 校を対象に、さらに、平成 24 年 10 月から 11 月にかけて兵庫県・中西播地域の公立学校 154 校を対象に、「異年齢集団による交流」の取り組みに関する調査を実施した。調査表の回収数(回収率)は、香川県の小学校が、144 校(80.4%)、兵庫県・中西播地域の小学校が 86 校(55.8%)であった。

1 年~6 年からなる「縦割り班」を編成し、活動している小学校は、香川県の小学校で 78.5%、兵庫県・中西播地域の小学校で 72.1%であった。平成 14 年の全国調査の編成率 76%と比べて、大きな変化はない。「縦割り班」の編成状況を学校規模別に見ると、図 1、図 2 に示

すとおり、小規模校で「縦割り班」を編成し、活動している割合が高くなる。

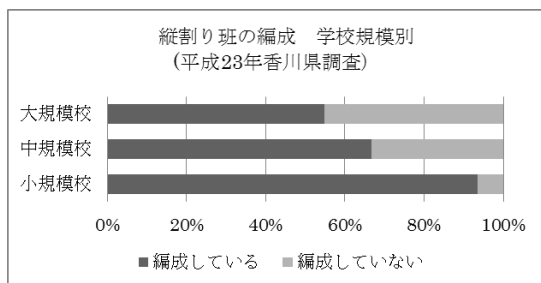


図 1

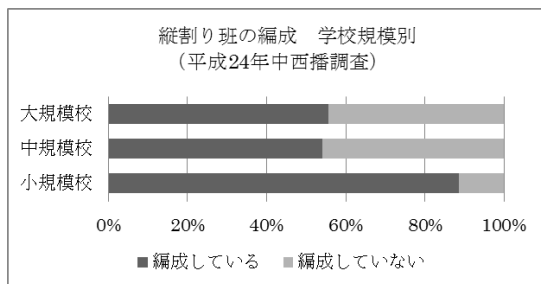


図 2

ペア学年・兄弟学級を編成し、活動している小学校は、香川県の小学校で 61.1%、兵庫県・中西播磨地域の小学校で 57.0%であった(図 3、4)。平成 14 年の全国調査でのペア学年・兄弟学級の編成率は 26.4%にすぎない(図 5)から、この 10 年足らずの間で、ペア学年・兄弟学級を編成し、活動している学校が顕著に増えたことになる。

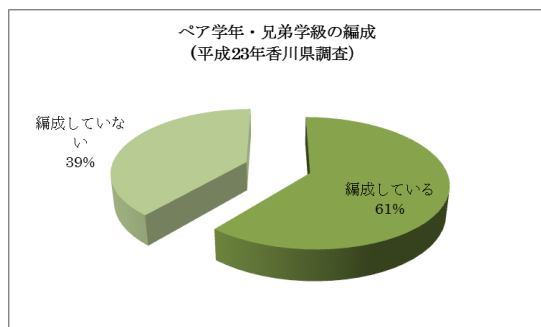


図 3

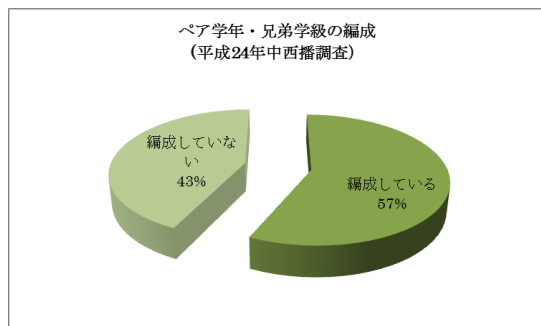


図 4

ペア学年・兄弟学級の学校規模別の編成状況は、図 6、図 7 のとおりである。学校規模が大

きくなるほど、ペア学年・兄弟学級による異学年交流に取り組んでいる割合が高くなる。

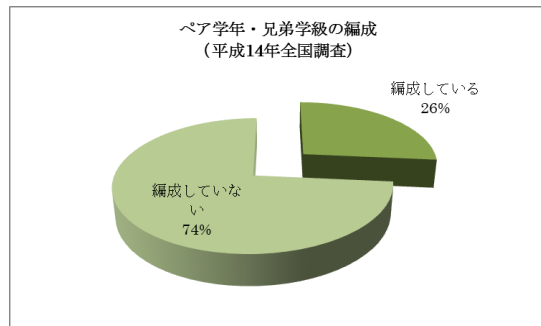


図 5

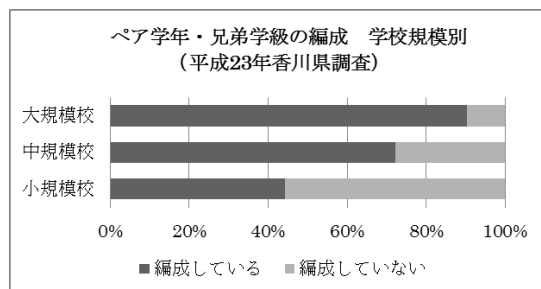


図 6

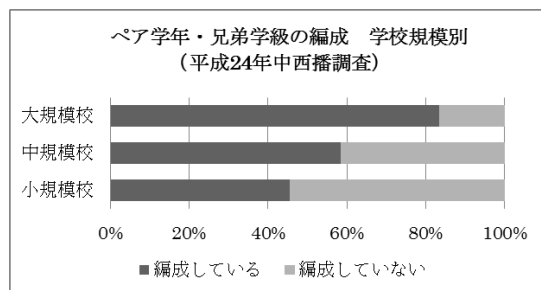


図 7

3 つのタイプの異年齢集団活動について、学校規模との相性(向き・不向き)をまとめてみると、「縦割り班」活動は、小規模校向きの異年齢活動。ペア学年・兄弟学級による活動は大規模校向きの異年齢集団活動。地域ごとの集団活動は、学校規模によらない異年齢集団活動である、ということが出来る。

(2) 姫路市内の公立小学校 69 校における「縦割り班」およびペア学年・兄弟学級の編成状況を、図案化されたマップの上で一望俯瞰的に示したものが、次の 2 つの図である。学校規模を模様別に示した小学校区の上に、「編成している」「編成していない」の記号を重ねてみると、それぞれの異年齢集団の編成状況と学校規模との関係が、視覚的によく理解できる。

まず、「縦割り班」の編成状況のマップ(図 8)を見ると、山間部の小規模校では、「編成している」の記号が高い割合についており、中規模校では、「編成していない」の記号の割合が高くなる。市街地とその周辺の大規模校では、そ

の割合がさらに高くなることが分かる。

次に、ペア学年・兄弟学級の編成状況のマップ(図9)を見ると、市街地とその周辺の大規模校には、「編成している」の記号が高い割合でついており、逆に、山間部の小規模校には、「編成していない」の記号が高い割合でついていていることが分かる。

○縦割り班の編成(姫路市69校)

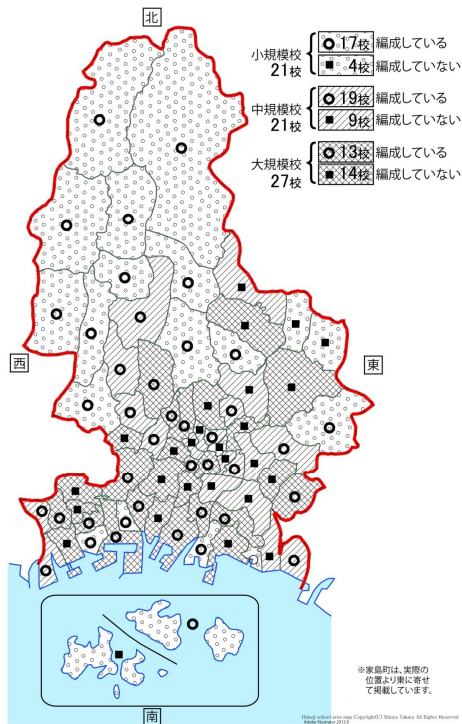


図8

○ペア学年・兄弟学級の編成(姫路市69校)

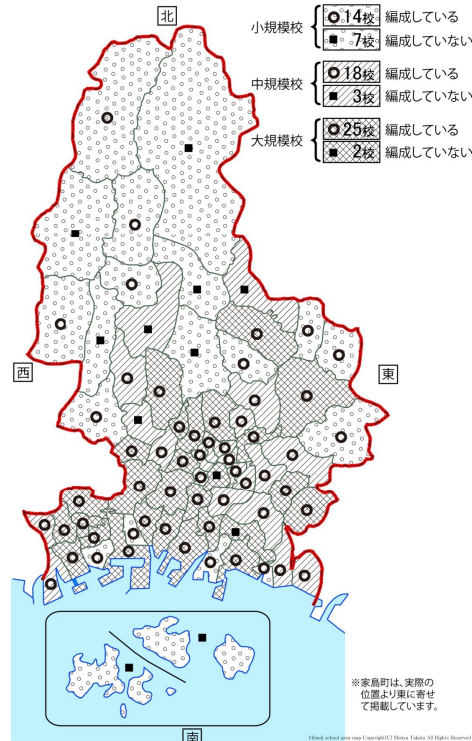


図9

(3) 香川県の小学校における異年齢集団による交流活動の内容および実施頻度については、「5. 主な発表論文等」の を参照。

(4) 「異年齢集団による交流」の取り組みに対する、兵庫県・中西播地域の小学校の担当教員の意識を明らかにした。

兵庫県・中西播地域の小学校の特別活動主任は、勤務校の「異年齢集団による交流」の取り組みの現状をどのように評価しているのか。図10は、平成24年調査の集計結果をグラフ化したものである。

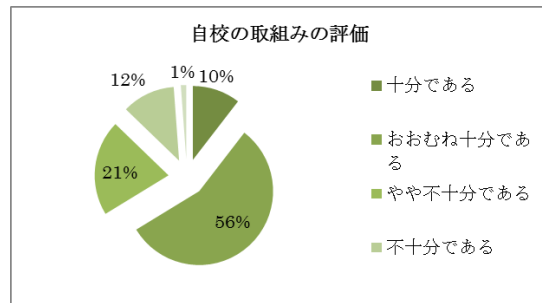


図10

小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みが、成果をあげるために必要なことは何か。とくに必要だと思われるもの(要件)を選択肢のなかから3つ選んでもらった。「異年齢集団による交流」の取り組みが成果をあげるための要件として、過半数の担当教員がリストアップしたのは「異年齢集団による交流」を実施するための時間の確保」「実施に当たっての教員間の意思統一」の2項目である。

下のA～Bの「異年齢集団による交流」の取り組みに対する意見について、兵庫県・中西播地域の小学校の特別活動主任は、どのように考えているのだろうか。「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまり思わない」「全くそう思わない」の4段階で回答してもらった。平成24年調査の学校規模別の集計結果が、図11～14である。

A: 「異年齢集団による交流」の取り組みに対する教員間の温度差が広がり、意思統一が難しくなっている。

B: 「異年齢集団による交流」に取り組む過程で、同じ学校の教員集団としての協働意識が高まる。

C: 「異年齢集団による交流」の取り組みは、何かと手間のかかる活動であるが、あえて取り組むだけの教育的価値がある。

D: 「異年齢集団による交流」の取り組みは、教員のかける労力に見合うだけの教育的な効果が認められない。

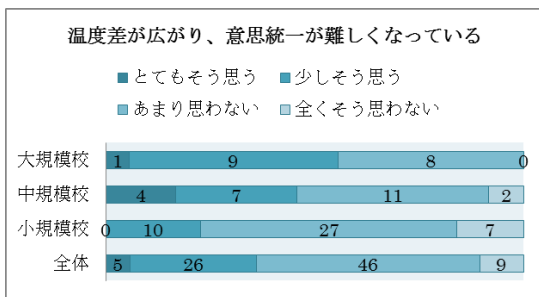


図 11

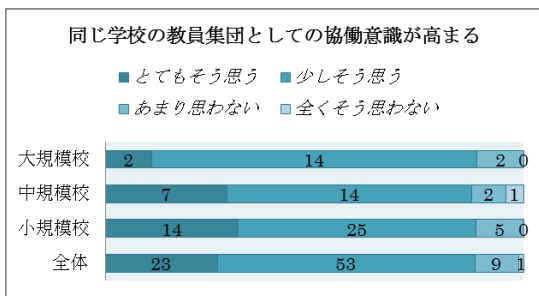


図 12

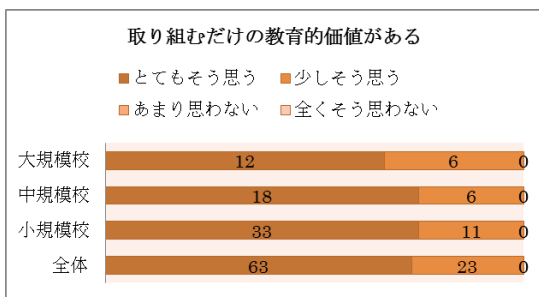


図 13

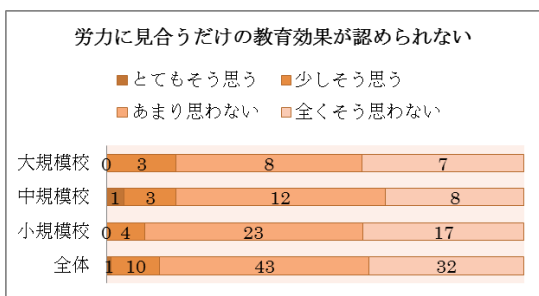


図 14

「異年齢集団による交流」の取り組みに対する、香川県の小学校の担当教員の意識については、「5. 主な発表論文等」の を参照。

(5) (1)- のところでも述べたように、この 10 年間で、中・大規模校を中心にペア学年・兄弟学級の取り組みが急速に普及していることは注目に値する。少し乱暴かもしれないが、小学校をめぐる新しい状況変化のなかで、「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年・兄弟学級の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっていると言ってもよいかもしれない。では、なぜ今、ペア学年・兄弟学級の取り組みが普及しつつあるのか。

上級生がグループのリーダーとなる「縦割り班」と比べて、ペア学年・兄弟学級では、上級生と下級生の一对一の関わりが重視される。どちらが上級生にとっての負担が大きいのか、また、教師にとっての関与の仕方が難しいかは明らかだろう。「縦割り班」活動におけるトラブルの多くは、上級生と下級生がそれぞれの役割 - リーダーおよびフォロワーとしての役割 - をうまく果たせないことから生じている。社会性の低下した子どもたちにとって、また、多忙感を強めている教師にとって、「縦割り班」活動は、いわばハードルの高い活動になりつつあるのかもしれない。

そもそも、「縦割り班」のなかで期待されている上級生の役割と、ペア学年・兄弟学級という一对一の関わりをなかで期待されている役割は、かなり違っている。一方は、下級生のことを配慮しつつ、集団活動の全体を「仕切る」リーダーとしての役割であり、他方は、よいお兄さん・お姉さんとしての役割である。お兄さん・お姉さんの目に映る下級生は、自分によくなついてくれるかわいい弟や妹であるが、異年齢集団のリーダーである上級生の目に映る下級生は、その都度の活動の目的に対して、勝手な動きをする中学年や足手まといとなる低学年なのである。それぞれの立場で期待される上級生の役割は、重なり合いつつも、かなり違っている。また、この役割を果たすことで育成される社会性についても、そのレベルや中身を問えば、実は、微妙に異なるものである。言ってみれば、一对一の関係のなかで 6 年生が 1 年生に頼られ、彼らの世話をすることで身につける力や自信（自己有用感）は、異年齢集団のリーダーとしての経験を通して身につける力や自信とくらべて、社会性のより基礎的な部分に関わっているように思う。

異年齢集団活動が、子どもの社会性の発達にとって、大きい意味を持っていることは間違いない。ただし、おおざっぱに「社会性」の育成に役立つと言ってみても、「縦割り班」の活動とペア学年・兄弟学級の活動では、どういうレベルの社会性のどういう部分の育成に役立つのかを問題にすれば、その役立ち方が微妙に異なっているはずである。

先ほど、小学校をめぐる新しい状況変化のなかで、「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年・兄弟学級の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっていると述べたが、この 10 年間で、「縦割り班」活動をやめてペア学年・兄弟学級

の活動を始めた学校は、それほど多くない。むしろ多いのは、「縦割り班」活動のなかにペア学年・兄弟学級の活動を組み込むことで「異年齢集団による交流」を全体として活性化させている小規模校と、これまで学校をあげて異年齢集団活動に取り組んでいなかったが、新しくペア学年・兄弟学級による活動を始めた中・大規模校である。今後は、こうしたペア学年・兄弟学級を中心とした取り組みを充実させるための条件、学校現場の工夫を明らかにしていきたいと考えている。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

毛利 猛、北村正巳、高田信也、小学校における「異年齢集団による交流」の現状 - 兵庫県・中西播地域での調査を手がかりに -、香川大学教育実践総合研究、査読有、28号、2014年、129 - 136頁

毛利 猛、小学校における「異年齢集団による交流」に関する研究 - 香川県下の取り組みの調査を手がかりに -、香川大学教育実践総合研究、査読有、26号、2013年、15-26頁

毛利 猛、それぞれの居場所、適切な支援、関西教育学会年報、査読有、35巻、2011年、216-220頁

〔学会発表〕(計 2件)

毛利 猛、北村正巳、小学校における「異年齢集団による交流」の現状と担当教員の意識 - 兵庫県・中西播地域での調査を手がかりに - 関西教育学会第65回大会、2013年11月16日、和歌山大学

毛利 猛、小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みに関する研究 - 香川県下の取り組みの現状と教員の意識に関する調査を手がかりに -、日本教育学会第71回大会、2012年8月26日、名古屋大学

〔図書〕(計 1件)

毛利 猛、哲学の講堂 - 中学生の君たちに、協同出版、2013年、193頁

6．研究組織

(1)研究代表者

毛利 猛 (MOURI TAKESHI)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：50219961